

アフリカ人の抵抗

おやさと研究所教授
森 洋明 Yomei Mori

現在、ブラザヴィル駅は閉鎖されたままである。90年代の内戦以降、反政府の闘争を続けているントゥミ (Ntoumi) の率いるの武装集団が、プール県 (Pool) 内にあるコンゴ・オセアン鉄道の橋脚を数年前に破壊し、列車の運行ができなくなっているからだ。2016年4月、政府は県庁所在地キンカラ (Kinkala) の北方にある彼らの拠点に対し、戦闘用のヘリを使って空爆を行ったが、大した効果はなかったようである。

このプール県は、以前に本稿で触れたキンパ・ヴィタ (Kimpa Vita) やアンドレ・マツワ (André Matsoua) の出身地でもある。植民地統治の初期、フランスに抵抗した一人であるマビアラ・マ・ンガンガ (Mabiala Ma Nganga) もプール県の出身でラリ語を話した。彼はコンゴ族を形成している部族の一つであるバスンディ族 (Bassoundi) である。このバスンディたちは、プール地域の南方に広く居住していた。ンガンガの詳しい生い立ちは分かっていないようだが、彼が植民者に対し、どのように挑み、どのような最後を遂げたかは伝説として語られている。

フランスがコンゴの植民地開発を始めた頃、鉄道は未だ敷かれていなかったため、大西洋に面した港から内陸のブラザヴィルまでは、陸路で物資などを運ぶ必要があった。大西洋沿岸のロアンゴ (Loango) の村々から荷物を運ぶ人夫を強制的に集め、キャラバン隊を結成して500kmにおよぶ道程を進んでいく。そしてブラザヴィルに入る前には、必ずこのプール地域を通り抜けていかなければならない。そこでンガンガは、入植者にとって重要な道路を破壊したり、キャラバン隊を襲撃したりして、植民地化に対する抵抗を行っていった。

植民者が持っている強力な火器に対し、真っ向から勝負しても勝ち目は無い。したがって抵抗と言っても、もっぱら神出鬼没のゲリラ戦法で戦うしかなかった。また、自分の仲間キャラバン隊を襲わせておいて、そのキャラバン隊を「悪者」から救い、感謝させることで謝礼を巻き上げるといった賢い方法も使っていたようだ。

ヨーロッパの植民地化に対するアフリカ人の抵抗は、さまざまな形で見られた。初期の頃は呪術や神のお告げに依拠したものもあり、その結果、自滅することも少なくなかった。たとえば1854年、南アフリカではコサ人のある少女が聖霊から「すべての牛を殺し穀物の蓄えを焼き尽くせば、太陽が西から昇り、死者は蘇り、白人たちは海に追い落とされる」とのお告げを聞き、コサ人の間で牛殺しが拡大していったのだが、結局は自分たちが食料難に陥ってしまい、多くの餓死者を出すことになった。

タンザニアの「マジ・マジ反乱」と呼ばれる闘争では、綿花の栽培を進めるべく住民に強制労働を強いたドイツ人に対し、「この水 (マジ) を飲むと銃弾にあたっても死ぬことはない」という霊媒師のお告げに勇気づけられた人たちが、水を飲んで戦いを挑んでいくのだが、多くの犠牲者を出す結果となった。

こうした植民地化に対するアフリカ人の抵抗は、圧倒的な武力の差によって鎮圧され、時には壊滅的な打撃を受けることになる。たとえば1904年、ドイツ人の進出によって土地を奪われたヘレロ族は、ドイツ人への攻撃で約100人を殺害するのだが、

これに対するドイツ側の報復は凄まじく、ヘレロ族の80%の人が死亡することになる。その数は数万人とも言われ、20世紀最初のジェノサイドとさえ言われている。

ベルリン会議 (1885～86年) 以降、アフリカ大陸がヨーロッパの列強国によって分割されていく過程で、イギリスは大陸の北と南から、フランスは西と東からそれぞれに勢力の拡大を進めていた。大陸を横断するフランスは、すでに領土となっていたコンゴを足がかりに中央アフリカ、チャドを経由してジブチに至るルートの開拓を目論んでいた。その先鋒を担うべく、1896年、マルシャン (Marchand) 大尉がコンゴに派遣されたのである。

200名の武装した探検隊とともに港に到着したマルシャンは、ロアンゴで集めた500名のポーターと共にブラザヴィルを目指して陸路を進む。その道中では、ンガンガの配下にあったバスンディ族の村々を、次々に鎮圧していくのだった。4年以來消息が不明だったンガンガの情報がマルシャンの下にもたらされると、20名の精鋭を彼の隠れ家に派遣し、包囲し、降伏するように促した。これに対しンガンガは、狙撃兵数名を殺害するという抵抗も見せたと言われている。しかし、最終的には周辺一帯が爆破されることによって、ンガンガは命を落とし、彼の抵抗は終わった。武力の差は歴然だった。

彼が植民地統治への抵抗の英雄なのか、それとも単なる略奪者だったのかは、その評価は分かれているようである。

ちなみに、コンゴで抵抗分子の鎮圧に成功したこのマルシャン大尉は、その後もコンゴ川を遡り、中央アフリカからチャドへ進み、1898年、現在の南スーダンのファショダという地点に到達する。そしてそこでナイル川を南下してきたイギリス軍と対峙し、一触即発の武力衝突の危機を迎えることになる。アフリカ大陸を縦断するイギリスと横断するフランスが交差したこの村の名前にちなんで、後に「ファショダ事件」と呼ばれるアフリカの植民地化における歴史的な出来事である。

今日、ブラザヴィルからポワント・ノワールまでの移動は、鉄道に代わって、飛行機以外ではもっぱら長距離バスが担うようになってきた。需要が多くなるにつれて、本数も増え、料金も安くなってきている。ただ、燃料などの輸送は鉄道に依存してきたので、首都では慢性的なガソリン不足に陥っている。そう考えると、首都ブラザヴィルを囲むように広がるこのプール県、とくにポワント・ノワールに抜ける国道1号線や鉄道が通っている南西地域は、昔も今も反体制派にとって重要な地点であるようだ。

2017年12月、政府とントゥミとの間で和平条約が結ばれた。ただ、武装勢力の全面的な解体には到っていないようだ。彼らは、表向きは反政府という政治的なスローガンを謳いつつも、実際には近隣住民や旅行者などから金品を巻き上げたりしているようで、単なる略奪者の側面も否めない。その点においては、ンガンガの歴史的評価と大差ない。現在もポワント・ノワールと結ぶ長距離バスは、治安の悪いプール県の南西地域を避け、ブラザヴィルの北方から抜けていく迂回ルートを使っているが、それはこの地域の和平が進んでいない証左でもある。